

『月刊高校教育』の記事から

平成28年9月

「月刊高校教育9月号」の誌上に、本校野球部の試合を日立で観戦された荒瀬克己先生の記事が掲載されました。先生は本年6月21日に、3年生対象の進路講演会で生徒に熱く語りかけてくださいました。冊子から記事を抜粋します。（著者・出版社の了解を得て掲載します）

元祖

「探究科」校長！ 荒瀬克己の 「おとなの 探究基礎」

第29回

荒瀬克己

(大谷大学文学部教授)

1953年生まれ。京都市立堀川高等学校長、京都市教育委員会教育企画監などを経て現職。中教審初等中等教育分科会・教育課程部会等の委員。NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」に出演。著書に「奇跡と呼ばれた学校」(朝日新書)。

若者たち

大西卓哉さんたちを載せたソユーズが国際宇宙ステーションにドッキングした翌日、わたしは日立市民球場で茨城県立土浦第一高等学校の野球の試合を観ていた。

どういうわけか今年は高校生に話す機会を多くいただいている。7月号では、あわてふためいた経験を書いた。その後も、新潟県、茨城県と続いた。タイトルは常に「ちいさなわたしを生きる」。言い訳のようだが内容は少しずつ変えている。

土浦一高では3年生諸君に話した。終了後、試験前ということで、会場の生涯学習センターに残って教科書を開いている生徒たちが多かった。勉強しなかっただろうに、わたしの話を聞いてもらった。申し訳ないことだ。

応援団長を紹介していただいた。実にさわやかな若者であった。先生方から土浦一高の応援はすばらしいと聞いていた。ガンパッテクダサイと声をかけて退出した。

そのあと学年主任の先生が慰労会を開いてくださった。たいへいとはとんぼ返りだがこの日は少し時間があつたので、ありがたくお招きにあずかった。失礼ながら、面白い先生たち。生徒



の話で盛り上がっていらつしやる。どの先生もうれしそうに話しておられる。堀川高校を思い出した。あの人たちもそうだった。懐かしい。それでつい、野球に話が及んだときに厚かましいお願いをした。試合ト応援ヲ観ニ行ツテモイデスカ。

日立駅に降りてびっくりした。海辺の空港のような建物。梅雨はまだ明けないが、夏のまぶしい日差しと風。改札口で出迎えていただいて球場へ。校長先生にご挨拶した。あきれておられるのではないかと心配したが、笑顔で迎えてくださった。試合前のキャプテンにも、保護者会長さんにもご紹介いただく。あの応援団長にも会った。

前の試合が延長戦で終わって、まだ熱気が残るスタンドに移動する。忙しく準備をする生徒たち。応援団は男女とも学生服だ。その中に、校歌か応援歌か、襟の擦り切れた、背中に刺繍のある学生服を着ている男子が1人。チアガールはいない。Tシャツ姿の女子生徒たちは、バレーボール部員。水の応援だそう。大量の水が運び込まれている。

客席に、ずいぶん大きな板が運ばれて、瞬く間に広い舞台がしつらえられる。そこには「応援指導部」と大書してあった。

そうか、応援団ではなくて応援指導部というのか。

生徒に交じって少なからぬOBの姿。さりげない指示。後輩たちをじっと見守る。彼らに対するとき生徒は引き締まる。

白手袋の学生服3人が両腕を曲げてはさむように長い旗竿を持つ。旗は2本。学生帽をかぶり太いベルトを腰に巻き着けた部員が2人、最上段で待機する。2人の旗手の間にも舞台。そこに小柄な学生服の女子生徒。身じろぎもせず無言で立つ。

抜けるような青空。ときおり強い風。全員が起立する。黒く光る竿をいただく部員が動く。旗手の渾身の力。すべての音が消えた。そして、ゆったり、旗が翻る。

舞台上に登場する部員は、姿勢を正して手と脚を指先まで伸ばし、位置に着いて一礼。女子も男子も、無理に張り上げているという感じのない、自然なよく通る声。そのための練習はどれほどか。きびきびと、大きく、白い手袋が輝く。

団長は、いや部長か、彼は手に書類を挟んだバインダーを持って袖に控えている。シナリオか。舞台上に立ったのは、最初のエールの時だけ。そうなのだ。彼は監督で、よって一番の裏方なのだ。必要なときだけ動き、グラウンドも応援席も旗も学生服も見ている。その視線の細やかなこと。

舞台上に立つ以外は、部員たちも裏方だ。応援の生徒たちに声をかける。暑イカラ気分が悪クナッタラ言ッテ。水飲ンデ。ミンナ立ッテクダサイ。次、〇〇イキマス。口々に、応援の生徒たちを応援している。「応援指導部」とはこういうことか。少しだけお兄さん。少しだけお姉さん。すがすがしい。

小声で声をかけ、バレーボール部員が旗手に水を飲ませる。学生服の首筋と靴の中に水を入れる。演舞の部員たちにも。上気した頬がきりっと締まる。

試合が進む。その表舞台と呼応しての応援。それもまた表舞

台。その陰で、めまぐるしく、機敏な動き。団長の視線。

入れ代わり立ち代わり、大板の舞台に学生服が立つ。響く太鼓の音。高らかな吹奏楽。味方に点が入るとたちまち、吹奏楽部との間にブルーシートが張られる。あれ？ 部員3人が舞台上に。周りから柄杓で大量の水。何度も飛び散る光のかたまり。乱舞。歓声。白い手袋。踏ん張って、風に圧される大旗を掲げ続ける旗手。傍らからそっと手を添えるOB。表舞台と舞台裏とが同時に、一切休むことなく躍動する。青空の下で、動と静が互いに支え合っている。吹く風。光。水。声。汗。熱。

京都で用事があったので、申し訳なかったが5回までいて退出した。よい時間を頂戴した。帰り際、相手校の横を通った。こちらも途切れぬ懸命の応援であった。よい試合は合作だ。そういうえば、よい授業、よい仕事もまた。

さて前回、柔道の先生のことを書いた。最後の「小指ニカラ込メルンダ」の意味が分からないというご指摘を受けた。確かにそうだ。これは、柔道着を持つとき小指に力を込めれば相手をしっかりつかめるという意味だ。竹刀を持つのもまたそうだと聞いたことがある。そこで、一見役に立ちそうにもないことが、実はとても大事だということを教わった、と言いたかったのだが、力足らずで反省している。

もう少し言うと、ある事柄は多くのものから成り立っているが、その中で、自分が気づかずにいるもの、目立たぬ存在の価値を見いだし認めることが重要ではないか、ということだ。

多くの働きがあつてものが成り立つ。あらためて、自戒を込めて、このことは忘れてはならない。ものごとに向き合う際、あらゆる意味で、姑息であつてはならない。

あの若者たちに会って、新鮮にそう思った。